



つみ
と

小笠原しま
寫生紀行

六世 茅

みづゑ 第三十六要目

前號要目

小笠原島清瀬村(水彩畫原色版)……………	丸山晚霞
小笠原島寫生紀行(一)……………	丸山晚霞
イースト氏寫生談(二)……………	石川欽一郎
八丈島大賀郷海岸……………	父島奥村歸化人の部落……………
父島奥村歸化人の部落……………	父島大村より
初寝浦に到る途上……………	父島初寝浦(水彩畫寫真版)……………
……………	丸山晚霞
……………	丸山晚霞
八丈島三根村の農家(水彩畫寫真版)……………	松山忠三
ピーター、デ、ウイント(五)……………	青人
春季寫生會……………	汀鷗
ないしょく……………	
其他寄書……………	近事雜聞……………
問答……………	讀者の領分等數項

○日技神社(水彩畫原色版)……………田上勉輔○イースト氏寫生談(上)……………石川欽一郎○藝術小言……………畔川生○水(下)……………霧鷗生○靜物寫生の話(三)……………大下藤次郎○ピーター、デ、ウイント(四)……………青人○明石の濱(線畫石版)……………大下藤次郎○六田の一夜……………汀鷗○恩師リチャーズ氏……………戸張孤雁○繪日記のうち(木版)……………大下藤次郎其他

『みづゑ』第一、三、四、五、六、七を除き他は殘本あり十部以上一時に入用の方には、多少の割引を爲すべし

大下藤次郎著『水彩風景畫帖』も猶少數の殘本あり



34





みづゑ 第三十六 明治四十一年四月十八日臨時増刊

小笠原島寫生紀行 (一)

丸山 晚霞

横濱出帆——海上——八丈島上陸

美はしい緑を愛で、椰子の香送る木陰に彩管を弄して見たいと思ふたのは多年の宿望で、そして一と月の間でも煩雑な浮世を忘れたいと思ふて萬事を犠牲にして小笠原島旅行を思ひたつたので、今年の一月十日横濱出帆の兵庫丸に搭じて渡航の途に就いた。同行者は吾日本水彩畫會研究所の生徒松山、志賀、の兩氏である。横濱港を抜錨した時は稀なる好天氣であつたが、東京灣を出ると兎角に冬の海の荒勝ちにて、船の動搖甚だしく、進航するとは無圖かしいので、難を相州金田灣に避けて投錨した。船室の揭示を見ると『天候不良ノ爲メ相州金田灣ニ避難ス明日午後三時出帆』一月十日 兵庫丸

小笠原島の航路は八丈嶋を經由するので、横濱を後二時に出帆すると、翌日午前六時八丈に到着するのが通例である、されど八丈には夏港灣無きため。同嶋まで達して眼前に岸打つ波や松林の間に漁家の點在を望みながらも、一朝にして暴颶波を擧ぐるの厄に遭逢すると、難を房州館山か又は豆州下田港に避くると

の事である。

金田灣碇舶は約一晝夜であるが、小天地の船中では頗る無聊に苦しむ、富岳の夕陽と日出、さては對岸の漁家漁舟等を寫生するうちに漸く午後の三時となつた。船は錨拔して航路南に向ふ。さなきだに急流烈しき黒潮、加ふるに荒れ勝ちなる冬の海の航路、平穩無事は望む可くもあらず。激浪船を呑んで動搖甚だしく、船暈は乗客の上に落ちて苦悶の聲室に充つ、余も聊か船暈を感じて氣色勝れず、眠るにあらずさりとて眠らざるにあらず、うつらうつらとしてゐたが、翌十三日の未明、八丈と呼ぶ聲甲板に湧き、午前六時八丈の北浦三根海岸を距る約一海里程の沖に投錨した。

こゝに十二時間碇泊するのであるから、無論上陸と決した。上陸の用意をして甲板に出ると、鳥も通はぬと唄はれし八丈嶋は眼前に浮び出で、左に聳立するは八丈富士、右は三原島の口の二峯立ち、嶋も今眼覺めしかの如く、峯を纏ふ雲淡く、全嶋皆淡緑を彩し、海岸を繞れる松翠滴る如く、平和と微笑の相を示して、宛がら吾等を歡迎するものゝ如く、舢舨の來る間ももどかしく思ふた。昨日までは茶褐に眠る内地の自然界に接して居つたが、一夜にして夏かと思はるゝ綠に接するその激變の眼新らしく、更に深い感興を與へられたのである。早速舢舨に移りて上陸した。富士と三原の間は展けたる高原で、この間一條の坦道が通じて居る。昨夜の雨に洗はれた焼砂の路に塵埃無く、夏のまゝなる路傍の草木は綠滴り、涼しき朝風を身に浴びつゝ辿れば、草叢の

裡に虫鳴きて、畑の畦畔には葦が紫葩を吐て居る。黃白の野菊も散點して居る。小鳥も歌ふて居る。天氣快晴氣候暖。何ともいふ事が出来ない快感で、この間の趣は詩である畫である。松原が見ゆる、家も見ゆる、牛の群も見ゆる。美裝奇しき八丈乙女が包を頭に頂て過ぐるに會す。松林に旭輝く。春着纏ふた余は暑を感じて上着を脱ぐ、内地の初夏である。船は十二時間の停泊であるから、一枚の彩畫を試むるより、寧ろ逍遙して詩興畫趣を養はんと、ポツケツトにはスケツチブツクの外何も持たなかつた。海岸より十數丁の高原、こゝより三根村である。

三根村は八丈富士の裾にありて、先づ奇しく眼に映ぜしは各戸の構へである。焼石を積みて外廓を繞らし、廓の上には多く椿が列植してある。家は多く茅葺にて床高く、二階建は稀である。殊に奇しきは倉庫の構造である、尺角程の柱を四本建て、地面より約五尺程の處に床を作つたのである、これは蛇、鼠除けのためであるとのこと。椿はこの嶋に多く、到る處のもの皆大樹で、丁度今が花時であつたから、各家々は紅花を以て包まれて居る。目白鳥其の他の小鳥は花に戯れて歌ふて居る。自然美と天樂。これを見これ聴く吾等の幸如何に多きや。

船暈のため絶食せし吾等も上陸して元の人間に歸り、美感に打たれて自然化しても、人間は矢張り人間で空腹を感じた、某食舗に入りて三食分を一度に喫す、粗膳ではあるが陸のものは旨い。該嶋土人の常食といふは、上流を除けば米を喰はず、甘薯と少量の麥粟等にて、米を食するは正月と盆との事である。

の三根村を過ぐるとそこに若干の稻田がある、畦畔には野花咲

めば緑の芝生かと思はるゝ。陸地に深く入るに従つて、幹も枝

き亂れて春の野の如く、この間五六丁行くと大賀郷村である。こゝは嶋中第一の大村で、嶋廳、裁判所、警察署、郵便局等の所在地で、稍市街の觀を呈して、島中唯一の殷賑地である。三根より大賀郷に亘り、入船のため大に混雜を極め、着送荷物の運搬牛の群、乗客の送迎、美しく着飾つた人も見ゆる。内地の友に出す記念書を郵便局に投じて、村の南端より急阪を下ると南海岸が見える、阪の下は展けた田野で、秣畑の間なる道を七八行くと、そこが南海岸で、先づ吾等の眼に新らしくしかも美しく感じたのは、この附近より富士の裾を繞れる一帯の芝生に横臥する松林で、吾高山の瀝松を見る様である。高山の松は雪のために這ふのであるが、こゝの松は風の爲めに這ふのであらふ。幹は短かく横に傾き、枝葉密叢して陸の方向に横臥して居る、その葉先はよく揃ふて鋏もて刈りたらん如く、遠く望



八丈島大賀郷海岸
丸山晩雲筆

探りこれを平視した輪廓の如く、それが皆劍岩で僅の沙濱もな

も、稍伸びこれを防風林として漁家其の間に隠れて點在し、小兒の聲鶏の聲等聞こへ、時に炊煙の立昇るも見えて、閑雅幽邃である。松林を出て芝生を過ぎて海岸に至ると、そこは火山岩の突岩怪石で、恰も刀刃を逆植したかの如く、又は斷崖壁立したるものありて、打ち寄する怒濤はこれに激して白浪を狂散して居る、實に壯觀奇觀である、しかもその岩石は深黒色を帯びて、黒々海黒き岸と、純白の波、見るから凄絶の感が起る。怪石の間僅に一小舟を入るゝ程の小灣がある、これを八重根港といふ。北風のときはこの沖に船を投錨し、舢舨を以てこゝにて荷物のあげをろしを爲すのである。が波高きとき、一度操手を過れば舟は劍岩に觸れて忽ち微塵と碎ける往時難波船の寄り來たるものもあるも、該島海岸線は屈折甚だしく、八重櫻の一輪を

いから、波濤に弄されて上陸が出来ない、終に岩に當りて碎けるとの事で、同島の恐るべき鳥も通はぬといふ語は、蓋しこの邊より生れたものではあるまいか。島内の閑雅幽邃と、沿岸の荒涼凄絶とは正反對で、譬へは鐵壁を以て外廓を圍繞した幽邃なる庭池の如き感がある。故に風景として八丈は變化に富み、外輪にありては壯美の畫趣を需め、内にありては優美の畫趣を縱にすることが出来る。八重根港頭より富士の裾なる松林の芝生を辿り行けば、葦蒲公英其他得知らぬ優しき草花の咲けるありてそこには放牛の遊び、牧者の唄ふ節面白し。

荒磯に碎ける浪音すさまじく、靜穩なる松林の裡に聞ゆ。濱萬年青路の兩側に茂り、ヤブニツケイの葉に眞晝の日光輝ける焼石の小道を過ると、そこには暗きまでに繁れる松林がある、道は其の中に通じて、入口を望むと恰もトンネルの如き。内部に進み行くと、密叢せる松は細枝細葉を重ねて、殆んど日の光が漏れない、入口出口より這入光線に微明を放つのであるから薄暮の様な感が起る、間斷なく激浪の音が聞えて靜寂を破るが、かかる境が無聞であつたら、幽玄なる神秘的の感に打たれたであらふ。こゝを出づると光景一變展望廣濶の丘に出た、富士の裾は長く引きて海に入り、白浪たどるあたりより、黒き海を約一里程の位置に、直線的の嶮しき島が浮き出して居る、八丈小島は即ちそれで遠方よりは平地等見えなく、人の棲む可くとも思はれないが、宇津木及び鳥打といふ二小村があつて、爲朝の終焉地であるとの事。こゝより海岸近き芝生を引返し、大賀郷の字

大里といふに向ふた。東に廻れる海岸は一帶の斷崖で、その手前に僅かの石濱がある、大里村へ行くにはこの石濱近くの秣畑の間、小流に沿ふて登るのである、そこは常盤樹に掩はれた溪谷があつて、道はこゝを通じてある、迂回しつゝ登り行くと、路傍の崖又は溪流のほとりに奇しき草花が咲て居る。午後の日光は美はしき緑を透して、ぼれ、光は綠苔に輝き、小島の歌は綠蔭深き裡より聞こえる。落椿布ける上を漫步して上り行くと、鶏犬の聲近く、梅薫り又は橙の黃熟せるものもある。大里村はこの森陰である。大里村の家構の外廓程麗はしく感じたものは無い、波濤に摩擦されて海岸に打ち揚げられた滑かな橢圓形の石、しかもその石は皆同形態にて、それを一列二列三列と數も線も亂さず整然と積上げ、高きものは數丈に至る、その上には松を列植するあり、例の椿を列植するありて、城壁かと思はるゝ大構への家もあつて、廓上の樹木は皆繁茂して枝を垂れ、なかば綠に掩はれ露はれた石は青苔滑かに古色を帯び、風致實に愛すべきである。古羅馬の殘壘愛すべく、支那の古城壁又賞すべし。されど天工を其のまゝ利用したるこの外廓は、他にその類例なく此島特有であらふ。村は雄山の南面傾斜地にありて、居ながらに海見るべく。樹木鬱蒼と繁茂して空氣清淨、南面の日射はよく諸黴菌を殺し、十日の汚塵は一朝の雨に洗掃して山下の海に流し、溪流の清水は筧を傳ふて全區に渉り、排水佳良なるため果實よく熟し花四時に開らく、小島又四時に歌ふ夏は涼風來りて冬暖かく、余が理想の境地はこれより遠くはあるま

いとまで感じた。巨大の松並木を前にし、常磐木の森を背にし

は島田鬚よりは當世流行のひさし髪が多い。

たる島廳の側に水槽がある、水汲娘が群つて居つた。八丈婦人の業務といふのは、八丈縞の原料たる蠶業と其機織と水汲みとの事である。水汲娘は三斗入程の桶に水を充たし、夫に木の葉を浮べて頭上に頂き、三三五五往復する様は奇觀で、風俗畫の好モデルである。此村も今を盛りに咲き競ふ椿に掩はれて、箴の音は里謠と和してこの間に聞ゆ。椿の葉は黒緑で、これに鮮紅純白の花を着けると、陰鬱の感を吾人に與ふるもので、内地にありては社頭寺院又は墓地によく調和するのである、が、この島はあまりに多きたゆか、又は目白鳥の多く群れて歌舌を弄するためか、内地に見るものゝ如く陰鬱の感は起らなかつた。

島民は半原人の如く頗る素朴である。物質的文化の今日にこんな人間を見るといふのも、島に良港の無いため、文明の魔風が割合に這入らぬからである、されど娘等



八丈島三根村の農家

八丈は一小島であるが、四五時間に於ける外部の觀察にてはその千分の一を盡す事も出来ない、殊に阪上と稱する東半面なる檜立、中之郷、藍ヶ江、洞澤、未吉等には行かれなかつた、鳶の口、三原、阪本、富士の諸山は遠望しただけである。こゝに二三ヶ月も滞留したなら充分の觀察も出來、畫材も多く得らるゝであらふ。冬の八丈島は吾等内地人より見ると、春と秋を兼ねた冬である、僅かばかりの紅葉も見た、野生の水仙花も咲て居つた、菫、蒲公英、野菊其他名を知らぬ花も咲て居る、小鳥は好く歌ふて叢中虫も啼て居つた。避寒地としては無二の仙境であらふ。然して吾等の外觀を以てすれば、前にも述べし如く頗る變化に富んで居るから、スケツチ旅行として一度は遊ぶ可き境であらふと思ふ。午後四時三根港に歸れば、埠頭は混雜を極め、牛の群人の群、全村のものゝに集合したかの様であつた。

舢舨待つ間海岸の寫生をなし、奇石を集め奇草奇花を採集し、本船に歸つたのは十時頃であつた。この夜月明く海上波高し。

八丈出帆、小笠原父島上陸とその日の逍遙

午後六時八丈の三根港拔錨。靨黴と立凖めた淡い灰色の空氣に落ゆく夕陽の微光を浴びたる優しき富士の頂嶺は微紅を彩り吾等を見送りて再遊を促するものゝ如く盡きぬ名残りを吾等は惜しみぬ。船の進むに従つて緑の島は紫に灰に變し、沿岸の黒き岩に碎ける白浪も消えて、何時しか跡無く水平線に消没した。荒海の波高く、暗藍色の空に宵月懸りて、黒き海に光を燦かして居る。晝ならば青ヶ島はこの先に見ゆると乗客の一人はいふた。大きな水鳥は船を掠めて飛び去る。この夜は稀なる好い風であるとの事なれど、波高く船動揺して、南から吹き來たる生暖かい微風が頬を撫で、何となく不氣味であつた。晝の疲勞に又聊か船暈のため心地悪しく、室に歸つて横臥し、この夜は好く眠れた。翌日は終日波の音を聞き、日暮甲板に出て、夕陽の美彩に接した、が興多かれど晝にはならかつた。翌十四日午前四時頃である、小笠原島が見えろと甲板の上で呼んだものがある、吾等の一行と他の二三のものと甲板に出づると、月は今落ちたばかりか薄暗い海の遙かに大小の島影が見みる、それは小笠原屬島の一なる賀島列島であるとの事。昨夜以來小雨降りて今は止んで居るが雲は低く垂れて暖かい風が吹く、フラネルの寢巻で甲板に居つても寒くない。今より二時間の後には父島一見灣に到着するとの事なれば、船暈の苦も僅の間である。暫く

横になつて居つたが無論眠れなかつた。夜は全く明けはなれたれば、人々皆甲板に上る等、沈黙であつた船内は俄に陽氣づき余も又そこに上つて見渡すと、昨夜の雨に濡れし甲板は洗ふた如く、父島列島は前に展けて、瘦削せし高低の山岳重なり、沿岸皆斷崖にて、山は剝落し肉露はれ骨露はれ、軟草矮樹其間に點綴し、鬱蒼として雲の如き森林は絶無で、しかも剝落せしものは赤赭と黝黒とにて、暗藍の海に浮び出でしさまは活氣に乏しく、優美を缺き、着色せる漢畫の山水を見る如く、綠蔭に重きを置きし余には大に失望の念を興へられたのである。船は二見灣口に向ふと、左にウエルカムロツグあり、右に野羊山の斷壁ありて、そこを入ると二見灣である。二見灣は太平洋中の散島に比類なき良灣との事で、今迄動揺して居つた船も、ここに這入つてからは進行も感じない程である。大村の埠頭に近き邊に投錨した。灣外と灣内とは光景一變して、灣を繞れる一帯の山は樹木繁茂し、奇しき棕櫚科の植物が高く直上せるものが多い。大村の濱には、白幹黃緑の樹が一帶に繁りて、一二の家見へて大村の人家は見えない埠頭には數十の人々が群つて居る。氣候は暖かいといふより暑かつた、上陸に際して手荷物が多いため、冬服の上に更に冬着のオーバーコートを重ねたのであるから、暑苦しさは焦熱地獄である。昨夏の炎熱には白馬山に登り、氷寒の雪田に凍え、今日は三冬の嚴寒小笠原の炎熱に冬着を重ねて暑に苦しむ。余が奇を弄するの甚だしきやと獨り默笑をもらすうち、舢舨は埠頭に着た。余等一行の來ることを、兵庫丸事務

長より豫て通じ置たので、金子といふ旅舎の主人はこゝに余等を迎へたのである。埠頭に群集して居る人々は無論内地人であるが、人種の異つた歸化人も雜つて居る。一木一草より山容海色、さては空の色までが内地と趣を異にして居る。同じ島にても八丈は内地の面影を認めたが、こゝに到れば乾坤一變の感がある。昨夜來の雨は、

曇りも降りて、朝まで曇りし空は全く晴れて、拭ふた様な暗青の空に日は輝き、白砂の路を案内されつゝ行くと、路の兩側には嘗て南洋に見たる植物が繁つて、花咲けるもの實を着けたものもあり。約一丁程行くと、そこが大村の通りである。二見灣よりは防風林に隠れて見えなかつたので

ある。白砂の通りは區劃整然とし、家は小なれど軒を列べ、暗緑鮮緑の樹木はその間に點綴し、内地の眼を初めてこゝに移すと、如何にも奇しく感ずる、凡てが歐化された趣がある。暫くして宿に着く。門を入ると珊瑚礁の砂礫が敷てある、其兩側には



父島與村歸化人の部落
丸山晩霞筆

香蕉が植へ並べてある、通された座敷は南北に面し、裏庭は平坦で、家よりも高く伸びたる香蕉數株ありて、重き程の實を着けて、暗紫の花は大なる葩を吐て居る、その他眼新らしき花卉の植込ありヘゴの枯木にて籬したる先は風防林にて、幹白き濱桐の巨樹は、鮮緑の葉と象牙もて作りて鈴の如き實を着けて居る。緑の

香を送る涼しい風が吹て來る。風防林の先は一帶の白い砂濱で、青い二見灣も樹間を透して見える。吾等は早速冬服を脱し、清水を呼んで全身を拭ひ、單衣に改めて清翠を眺め、涼風を浴びつゝ、黃金色のバナナを茶うけとして、一椀の茗を啜つた心もちに慥かに仙靈に通じた様であつた。船暈は陸地を踏むと忽ち全癒するもので、船中の苦悶

は跡方無く消滅した。同時に感じたのは空腹である、一晝夜絶食の空腹をこの朝充したのである。食後輕装しての無き逍遙に出かく。大村の町を西に向つて進む。この島の家作は皆小さく内地の家に比する皆小舎の如くて、二階建といふのは僅かに二

三あるのみ、暴風烈しきためとの事である、家根は多くビロ―樹の葉にて葺てある。蕃瓜樹^{パパナ}は家より高く直立して、緑と黄なる實を幹に着けて居る。椰子の樹又高く伸び、暗緑に茂れるゴム樹は氣根を垂れ、白砂の路に涼しさうな暗き蔭を投じて居る。數戸の荒物店又は島産を鬻ぐ店、蕎麥屋八百屋肴屋もある。タマナ樹の茂れる間に小學校の大なる建物がある。石造の郵便局がある、大にして且つ美なるは、この島唯一の建築である。椰子樹を門の前にし、樹木に蔽はれた建物は警察署で、その附近に島廳裁判所監獄署がある。三ヶ月山より流れ出づる大村川の橋を渡りて、タマナの並木道を行くと、その部落を西町といふので、歸化人等も栖んで居る、何れも庭園廣く、果樹香蕉等茂りて、家は皆これ等の綠に掩はれて居る。測候所の前なる坦道を行くと、風防林の中に這入る、この盡る所より赤土の阪路を登ると、昨夜の雨の乾かざるため道迂りて、赤土は粘着し、下駄に附着して、容易に取り退く事が出来ない、頗る困難を極て攀ぢつゝ上ると船見山の一角墓地に出てた、美はしき芝は一面に地を蔽ひ、墓碑其間に散點して居る、一墓碑の前に白き花手向けたるあり。この間を辿り行くと、丈長き茅細逕を掩ふて身をうづめ、漸く山背に出て、草に踞して展望すれば、今朝入りし二見灣口とその灣内と、大小の山岳の起臥して波の如きと兄島弟島とを見る。この邊タコ及ビロ樹多し。道を轉じてこゝを下ると、甘蔗畑パイナアツブルの畑がある。大村の町を一望する丘の側面に、胡瓜、茄子、南瓜等の花咲けるもの、實を結びし

ものがある。内地の嚴寒に對比すると、今日この頃實に珍奇とすべきである、が冬知らぬこの島にありては、これが普通であるから更に珍物でも何でも無い。船見山の麓で鶯が頻りに啼いて居る。こゝを下ると僅かの平地がある、そこに砂糖製造所の小舎がある。こゝを下りて大村の宿に歸つたのは正午頃であつた。

午後又宿を出て、東海岸の方に向つた。埠頭の附近は風防林を廻らして、島廳の苗園がある、濱萬年青、椰子、子ム樹、メリケン松其他南洋より移植したるものが培養してある。海岸に出づると、一條の道路は灣の沿岸を通じて居る。沿岸は多く斷崖で、タコ樹のこれに懸りて長き氣根を垂れて居る、この樹はパングナ、榮蘭、林投樹、露兜樹等の名稱ありて、南洋諸島には到る處に連生して居る、高さ一丈位より四五丈に餘り、本幹より七八、時にば十數の氣根を垂れ、氣根の地に入りてそれより更に根を生じて、本幹を支へて居るから、烈風にも折れない、梢上數枝を岐ち、枝頭一所に細長き數葉生じ、色深緑にして光澤あり、長きものは四五尺より八九尺に至り、葉間果梗を垂れ、龜甲紋をなす團塊の實を結ぶ、生は青緑で熟すれば一半赤く一半黄となりて美彩を放つ、幹より氣根を垂れし狀、恰も蛸に似たるより名附けられたのであらふ、葉は席、帽子、籠等を製し、實は食川となり、南洋諸島には尤も有用の樹にして、美感の上よりも風趣に富んで居る。本村より二丁餘にして、隣濱といふ一沙濱がある、濱桐の風防林を繞らしたる蔭に、歸化人の家二

三戸あり、家のうしろには稍平地ありて、果樹香蕉の類が栽培してある、家に附着して小花園がある、紅白の花が咲て居つた。こゝより又斷崖の下を二三丁行くと清瀬といふ處がある、こゝには石炭貯藏小舎と、二三の船小舎と一農家があつて、蔬菜香蕉等の畑もある、海岸に接してタマナ、海岸イチビ等密叢して、

道は其の間に通じて居る、満潮のときは林際まで潮の打ち上るためか、美しい沙地がある、タマナの厚き葉は暗緑に光澤を帯び、日の光のこれに映じて輝き、暗き蔭を白砂に投じて、深紫の色を呈した濃淡の對照は、如何にも熱く感じられ、あまり遭逢せざる畫材であるから一種の感興を起し、明日は小笠原到着の筆初めとして、こゝを寫生なすべく決した。今日は風無く平穩の日和である。清瀬の森を出づると橋がある、橋の下は干瀉にて多くの蟹が群つて居つた。崖又は山腹に傍ふたる沿岸を辿り行くと、水鳥の干瀉に遊ぶもの、小鳥の森に歌ふありて、雜



父島大村より初寝に到る途上
丸山晚霞筆

草の上には蝶が舞て居る。内地の初夏である。奥村に到着して或家を訪問した、そこには八丈生れといふ婦人ありて、吾等のために茶菓を供してくれた、辭するとき内地流儀に銀貨を投じて二三丁行くと、跡より追かけて來たのが今の主婦で、投じて置た銀貨は受けぬといふのであつた。後に到りて、其の家は歸

化人の家で奥村一の資産家だとの事である。奥村の海岸は遠淺で美しい白沙の濱である。海岸の風防林は皆巨樹で鬱蒼として居る、それに圍繞された奥村は田園拓け、果樹蔬菜の栽培せられし間に歸化人の家屋が點在して居る。森林中の坦道を左折して行くと、奥村河の沿岸に出づるので、モ、タマナの紅葉を見る。香蕉の深き處鶏犬が啼て居る。時計は午後四時を報じた。元來し路を引返して大村の宿に歸る。入浴を終りて後園に出づると、日は西に没し、宵月は空にかゝりて、濱桐の葉に影を宿し、月の花かと思はるゝ程美しい。

浴後月明の散歩

浴後の肌を微風に吹かせ、月明に乗じて大村の町を散歩す。名奔利走雑沓の巷に引換へて、何れの家にも島の太平を謡ふて居る。西町には歸化人多く栖みて、香蕉深き庭池より樂の音等聞こゆ。月の夜には煙かと思はるゝメリケン松は、この邊に多く茂つて居る。タマナの垂樹が兩側に立ちて路を掩ひ、この間は暗くて、布きつめた珊瑚礁の破片に下駄の觸るゝとき、チリンチリンと金屬の音がする。タマナ樹一名テリハともいふ、光澤ある葉に月を宿して、星の如く螢の如く燦爛としたさまは、内地に見る事の出来ない南洋特有の美觀である。暗き蔭の所々に月光輝いて白く光つて居る。鳥廳の前を過ぎ監獄署の前に出た、小さな溝を前にしてそこに橋を渡して門がある、門には點燈の設備はあるが點燈してない、構に面して板塀がある、それも破れて門の必用を認め程である、そののみか署内に燈光がなかつた、定めて庭内は雜草が生茂つて居る事であらふ、余は荒涼たるこの光景に接し、豫ての理想の實現に絶喜したのである。物質的文化の今日、日々の新聞紙は罪惡の記事を以てその三面を充して居るのに、こゝは名ばかりの監獄署を持つて居る、小笠原の名譽は實に誇りとするに足るのである。小笠原は桃源である。余が理想郷である。余は今宵月明に乗し、ゆくりなくこの好畫題を得たるを喜び、甲斐ありしこの旅行に満足したのである。こゝより道は小流に傍ふて、タマナ、メリケン松等の間に通じて居る、この道の何れに通じて居るかは無論知らなかつた

最早村を過ぎて人家はこのあたりに無い、一路傍の草叢には好い聲を放ちて虫が鳴て居る。月の光は秋月の如く澄みて、微風顔を拂ふて心地よく、これといふ目的なしに一丁行き二丁辿る、道はこゝより阪路となりて山に登るのである。神の御心を得たる桃源には鬼栖まず、といふ事を自覺したのであるから、心の底から安心を得たので、夜であらふが山であらふが、森林であらふが、淋し味は少しも起らぬ。阪路を辿り行くと光景一變して巨大なるビロ―樹の叢生して、恰も數百の柱を建てし如く、月のこれに懸りたるは、ゴヂツク風の大寺院の裡にありて、神の御光に接したかの如く、叢中の虫聲は神かと思はるゝのであつた。折りから阪の頂より下り来る人々の嘶聲が聞こへる、その人々は漁夫にて大小の魚を擔ふて下つて來た、余はこの人に就て何れに通ずる道なるかを尋ねると、宮の濱に行く道で、そして宮の濱はこゝよりあまり遠くないとの事である。今宵の靜夜月を踏んで宮の濱邊を逍遙するは如何に趣味多からんと宮の濱行きと決し、茲に目的は出來た。ビロ―樹間を數丁登ると、そこが阪の頂上で、北の海一帯兄島弟島も見え、宮の濱は直下に展けて燈火一二點を認む。今來し方を望むと、大村と三ヶ月山の間に二見灣が現はれ、境浦邊の漁火も見えた。阪を下るとそこより甘蔗畑で、急阪を迂曲して漸く平地に下ると香蕉椰子等に蔽はれた人家二三ありて、こゝが宮の濱である。如何に月明なればとて、このあたりを逍遙するものは他にあるまい、農家を驚かすも不本意なれど、先づ一農家を訪問して來意を通じた、

若き夫婦もの居りて彼等は八丈より移住したとの事。山中の一軒家に、世に憚からぬ戀に浴さんと何かの戀物語に見たが、波路遙けき島の一隅、宮の濱邊の一とつ家に世に憚からぬ戀の勝利者と彼等を見たら、この間は詩である畫である、彼等が單調の生活に、稀に訪問する人あらば嬉しからん、心をこめたる待遇ぶりに山茶も甘く味ふたのである。元來し道を引き返すも興なければ、大村に歸る他の道をとることにした不案内なればこの家の主人はそこまで案内するとして、導かれてこの家を辭した暗き風防林を出づると一帯の砂濱白く彎曲して、黒きカノー船が散在してある、寄せては返へす白浪に月碎けて黒い海を隔て兄



父 島 初 晩 籠 筆

を傳ふて漸々峯の方向に通じて居る、このとき踏み誤まつたことに心附いた、が興を求むるには變化の多いのにあるから山の頂巔に向つて進むだ。脊より峯に亘りて地面が露出して居る。晝見たらこゝも赤土であらふ。漸く頂に登ると、こゝより道は二方に別れて居る、左りの道をとつて下ると、道は草に隠れて

こゝよりけ道をたよらな
いで、足場のよい處を選
み、木の間や叢をくぐり
つゝ行くと、直く下に畑
が見ゆる、畑があれば必
ず道が附隨して居る、畑
を見的に漸く下つた、果
して道があつた、その道
を辿つて行くと、道より
稍々高き所に農家があつ
て、燈火も見ゆれば人語
も聞こゆる、この道を行
けば必ず二見灣の沿岸に
出らるゝと思つた、がこ

嶋の山が突起して居る。濱の白砂に吾等の足跡を印しつゝ二丁程進むと、暗き風防林の間に細道がある、そこにて委しく道を教示されて、林投樹ビロ一等の間を辿りて山の脊に出でた、小運は二つに別れ、余は誤て右に踏み込むと、その道は山の脊

に立寄りて尋れた、主人は病蓐にあつた、小舎ば農家らしいが、主人と内部の状態は農家では無い、内地の人が煩雜界を避けてこの嶋に渡航し、幽邃の境を占めて靜養して居るものには、あるまいか等思はれ、この間の趣きも詩的化したので、果

して詩的であつた、數日の後この主人と新知己になつた、主人はこの官吏で主義は余等と同一である、一樹蔭の縁は今友となつたのである。この家に茶菓を饗され、親切に案内されて清瀬に出て、二見灣頭に月を賞しつゝ、變化多き月下の逍遙を果して、宿に歸つたのは十一時であつた。

ピーター、デ、ウイント「」

青

人

デ、ウイントが公立畫館に於ける冒險をこゝに語らん。氏がロイヤルアカデミーに初めて認證せられしは一八〇七年なりき。氏の繪畫はトレンサムの景色と、一ツは氏が愛着の畫題たるナトロツク、ハイ、トリアなりき。翌年美術家協會の設立ありて、此の展覽會に氏は水彩畫二枚を出品しぬ。一八〇九年に九人に撰ばれて、斯會の會員となりぬ。時の批評家はレボジトレ、オズ、アーツにて此新來の美術家を叙して、其畫風を論じぬ。實にデ、ウイントは自然を正格に觀察し、圖樣を撰ぶこと優麗に色彩真正にして單簡なり。又デ、ウイントの作品には重なるものゝ表明ありて、非凡なるものゝ萌芽を供えたり、と。かゝる説は氏が晩年の作には當筈るべくもあらず。殊に戸外の寫生畫は汚濁の色彩を塗抹したるものといふも過言ならず。

一八一〇年二月二十二日デ、ウイントは水彩畫會へ會員として入會しぬ。氏はフレデレツキ、ナツシ、カブレ、フイーデン

グと共に撰ばれぬ。一八一一年六月二日會員の希望にて、正員となりぬ。これが爲に、コツクスより早く人に知られるなりけり。コツクスは一八一二年六月に至りて初めて會員となりしなり。一八一〇年より一八一二年の間にデ、ウイントはワサイテ、オズ、スプリングダーデンの展覽會に十八枚の畫を出品しぬ。一つはヨークシヤイアのコミスボロー城の景にて、實に好畫題なりき。一八一五年のキヤタロクには、エ、クリケツトマツチを載せたれども、エリソン氏が一八六〇年にサウスケンシングトン畫館に出したるぞ、クリケタースてふ有名な畫と同様なれば、何れが何れを眞似れしかてふ事も判じ難し。兎に角にクリケタースの畫は高尚なる畫なれども、空を無視したる繪なり。此の繪には單一なる歴史ありしなり。之はデ、ウイントが此の繪畫は賣れざりしかば、新規の張換の費用を節するがために此の繪の上に他の畫紙を張りけるなり。氏の死後クリステースの競賣の準備をなしける時に、ヴォーキン氏が此繪を掘出しけるなり。されば此の人の當時の驚喜の狀を常に喜んで話しけるなり。若し夫れぞ、クリケタースが實際に一八一五年のクリケツトマツチと同畫なりせば、その埋没しつゝありし年月は殆ど三十四年餘ならざるべからず。

春の水のむや小鳥の咽うごく

畔川

イースト氏寫生談

石川 欽一 郎

戸外寫生 (下)

寫生は大急ぎに爲すをよしとす。そは光線が刻々變りゆく其間に物の形狀等を叮嚀に現はすことは困難なるが故なり。朝は影が左より落つるとしても夕方になれば右より落ち。其間終始影は景色の模様を變らしむ。勿論日光を止め雲霧を縛することも出来ざれば。我が自由のきく範圍内にて最上策を採らざる可からず。併かも専心寫生に熱注する間に、微妙なる自然の光景を能く觀察せんことは困難なれば。之れを分解して別々に研究するの必要あり。今畫かんとする畫題の各部を別々に鉛筆畫にて研究することは有益なるのみならず甚だ面白きものにて。此の如くして大作に用ゆべき材料の數々を集むるを得べし。寫生の際は。不完全なる畫を作らんとする勿れ。不完全なる畫は寫生に非らず。又た稽古と云ふより外には何の價値もなし。

風景畫には三の順序あり。曰く寫生。之れは主として色彩を研究するもの。曰く習作。之れは専ら形の正確を期するもの。最後に曰く畫。之れは寫生の清新なる印象と習作の正確なる形狀とを綜合したる者なり。畫は即ち終局の目的にして他は之れが手段なり。故に實を云へば。先づ手段を充分に研究せざる以上は終局の目的に達するこゝ難し。尤とも寫生は色が主なれば形はどうでもよいと云ふには非らずと雖ども、寫生の本來の目的たるや。形には多少間違ひあらうとも色彩は凡て正確ならざる可からずと云ふにあり。形は常にあれども色は絶へず變化す。之れを双方共同時に捕ふるを得ば此上なしと云へども。面白き光景現はるゝに際し形を専ら寫さんとせば色彩は終に完きこと能はず。又た大體の形狀は寫すを得べしとも全く意を自然の色彩に熱注せんか形は勢ひ忽かならざるを得ざるべし。

風景畫は畫家が我が感じを現はしたるものなれば。人により自然の細々したる部分を感じずるもあり。又た

廣き大なる處を感ずるもあり。要するに誰れにても自然を愛するものには必ず其酬あるべし。我が求むるものは自然は皆之れを與へん。山岳は土塊より成る其土塊が欲しゝとならば直ぐにそこに在り。噴火の煙に交ざる雲が入用とならば之れ亦あり。塵煙土塊を撰むも將た峨々たる高山を撰むも皆隨意なり。草の葉一枚々々を畫きたくばかくを得べし。凡て勝手にして少しも制限なし。併し縁を數ける春野に草の葉を求め金波動く秋郊に稻の莖を擇むの要あらんや。野は草の葉掩へるを知ると雖ども。一々之れを見るに非らず。只だ全體の色と形とを見るのみ。廣き大體の感じを得ば。之れ自然に對し忠なるものなること尙ほ普通は見ざる無限の細部分までも感じたと毫も異なることなし。木は枝葉茂り生あり風を含むと云ふことさへ分れば。葉を一枚々々細かに現はせるよりも反つて人は承知すべし。要するに樹木と云ふ一つの生物を現はすが目的にして。細部分の寄せ集めにはあらざるなり。毎日自然に就て習作と寫生とを怠らざれば必ずや追々と大なる畫をも試みんとするの勇氣も出で。又た筆を下さざるに紙上に躍如として其畫を想見するに至るべし。

初めに木炭を以て極大體の輪廓を引き。其上を鉛筆にて畫き後木炭を拂ひ去るべし。練習を積まば輪廓を畫かず直ちに色を着くることを得るに至るべし。繪具は手順よくパレットに配置す。即ち黃赤青綠の如き順にして。又た繪具の配置を一定の順序に定むることは寫生の際時間を節約するに肝要なり。大急ぎに變り行く光線の關係を寫生するに當りては時間は極めて貴重なり。今見ゆる處は忽ち消滅し又た記憶にも中々覺へ難きものなれば。此間に繪具を彼是と尋ぬる如き暇あることなし。故に何色は何處にあると能く分居ること音樂家がピヤノのキーの位置をよく知れる如くならざる可からず。繪具はたつぷりと筆に含ませ明瞭大膽にかくべし。

日のあたる處又た雲の影が落ちたる蔭の處など。調子や色彩に少しも相違ある可からず。光線蔭影の區別を確かと見極め之れでよしと思ふ處を畫くべし。若し未だ意に充たざれば暫く止めて丁度よき光線の來

るを待つべし。雲は色と形とを巧みに配すべし。雲の影は地に落ちて。構圖に面白き配置を示し又た景色の遠近を現はすに大なる助けとなるものなり。山腹の森は影となりて手前の土藏が日に輝くを見れば。森の蔭のときと日向の時との關係如何と容易に識別すべし。野に日は照りて萌ゆるが如き綠草も。日が蔭りては餘程落付いて見ゆるべく。カドミウムやオキサイド、オフ、クロミウムの如き明るき色をなせる前景の輝ける草も、日蔭とならばコバルトにイエロー、オーカー又はカドミウムにフレンチ、ブリューの如き色を現はすべし。

中景または遠景の色は近景の如く冴へざれども。目には凡て同じ感を與へざる可からず。即ち草は如何に遠方にあるとも近景にあると同じく草と云ふことが明瞭に知れざるべからず。一見して直ぐ之れは何んてあると云ふことが分らざる可からず。樹木家屋其他目に馴れたるものは其大小によりて遠近を直らに示せども。山腹の草原の如き廣き場處にありては。之れと異なり。空氣の色を察し正しき調子を以て其遠近を現はさざるべからず。

何人も中景を以て畫くに最も困難なりと爲さん。畫家の中には前景に用ゆる色を少しく薄くして中景に用ゆるものあれども。之れ大に誤れり。中景遠景をかくには繪具を全く換へ色の混ぜ方も凡て新らたならざるべからず。前景の草には濃き綠色を用ゆるとも。中景にはイエロー、オーカーと青を混じ。遠景にありてはロースマダーにイエロー、オーカー若くはアンバー等を加ふるかごとし。

前景。中景。森。日の當る土藏。田舎家を畫き終らば寫生は略ぼそれで出來上り殘る處は空のみなり。空の調子は風景の全體に能く照應し。雲の影は景色と能く關係調和を持たざるべからず。

雲の形は畫の位置と配合し。又た雲の有様は畫かんとする風景の有様と相伴ふべし。雲の大小をも能く研究し之れが爲め草原の廣さ。中景若くは遠山の距離を害さざるやう注意を要す。既に空をも畫き終らば次ぎは畫の大體に就て必要なる加筆を爲す。即ち極遠景の景色と空と接する部分に少しく畫き加へ。或は前

景の水溜りには青空を映さんか雲を映さんかを考へなどすべし。此場合に至らば決して急ぐべからず。先きに書きし光景は既に過ぎ去り又た最初に感じたる有様は更らに之れを究めん由なし。形は猶殘るとも色彩の關係は只だ自然に俟つの外何人も案出すること能はず。故に之れにて今日はお仕舞にするか。若し又たそれに満足せざれば明日天氣よくば再び來りて同じ有様の場合を畫くべし。漸く研究を経れば自得する處ありて困難も減ずるに至るべし。

次號以下には自然に對する態度並びに構圖につき氏の言説を譯出すべし。

從來日本では寫生の字を其物の通りに畫くのだと解釋して居つた、寫眞と同じものと思つてゐたが、西洋ではスケッチといふて花なら花を見て綺麗なものだと思ふ、その綺麗だと思つたことを畫く、これがスケッチ即ち寫生で、花の形ばかりを寫すのでなしに心を寫す、尤も形が出來なくては心が完全に寫せるものではないから、大に形の上の研究もやる、これが花とか山とか木とか家屋とか單純にそのものゝ感じを寫すのみでなく進んでそれ等を澤山に集合して一つの感想を自分から組立てる、語を換へていはゞ、寫生を組合せて一つのもので作るとなると、此時初めて繪畫の資格を與へられるものである、其實例は櫻の花の艶な處を寫さんか、單にこれのみなれば櫻の寫生といふべきだ、これに夜といふ境遇を被らせて、月といふ多情なものを添える、これが出來上るともう櫻の寫生ではなくて春の夜といふ繪になる、も一つは菜の一枝を瓶に挿んで見る、菜の寫生と瓶の寫生とが集まつて又一種の感想を作る、前の櫻と同じことで單に菜の寫生ではない。(繪畫と寫生、中村不折氏)

春季寫生會

汀 鷗

日本水彩畫會研究所では、二月初めの頃から春季寫生會の相談があつて、時は三月の二十一日、場所は東海道大磯で、一泊旅行と決定し、揭示したら申込者が續々あり、終に三十餘名を數ふるに到つた。

彼岸に入つてより兎角雨天勝ちで、三月の二十日にもかなりの降りて明日の天氣は甚だ覺束ない、てるく坊主を拵へるものもある、若し雨が降つてゐるといふ言葉を出すと罰金だといふ約束が出来て、『ア、イ、お天氣でビショくしてゐる』などと随分奇抜な文句も出た、終には此位降ればタトエ明日は雨でも、其次の日は屹度晴れるから、降つてゐても明朝出發するといふ動議が成立して、急に居合せぬ人達へハガキを出すといふ始末だ。

いよく二十一日になつた、空は拭ふが如く月の光が冴え渡つてゐる。五時半江戸川の停留場へ往つた、電車は來て居たが脱線して中々動かない、甚だ氣になる、漸く出たら満員のお蔭で急速力、途中二三の會員を合して豫定の時間前に新橋へ着いた。

新橋には二十四五人程集まつてゐる、昨夜の空模様で見合せた人もあるとの事だ。六時三十五分發車、車中では彼方でも此方でもスケッチが始まる、乗合の客は大抵鉛筆の尖に罹つたであ

らう、氣の早い連中は隅の方で晝の辨當を平けてゐる、横濱からみどり會の人が二人乗る、支部の人が一人乗る。汽車の戸塚邊を走る時空模様が怪しくなつて、雨、霞、續いて雪となつた、南の窓は慘憺たるものだが、北の窓は蒼空で失望した天氣ではない、それでも婦人連は尻込しく、茅ヶ崎で下りる豫定を大磯迄直行と決した。

やがて茅ヶ崎へ着いた、風は寒いが日光は華やかに射してゐる、一行は脱兎の如く停車場を出て本道をゆく、予とケー君とゼツト君とは海濱南湖院へ向ふた、こゝに日本中學の杉浦先生と文豪國木田君を見舞ふためである、かくて馬入川の岸で一行に合した。

川の兩岸では皆々熱心に寫生を始めた、目指す敵は大山である、大山一名を雨降山といふとか、あまり皆んなで責立てた爲めか、又もや黒雲が西の方から掩ひ冠さつて來た、やがてポツ／＼落ちて來た。

十二時に近き頃、汽車乗遅れのエヌ君とエス老人、并びに寫眞器もちたる一人の技師が來た、技師は直ぐ歸京するといふので、急に一同を招集めて撮影をした、離れてゐてレンズに入らぬ人も五六人はあつたらう、夫から橋の袂で晝食をすませ、徐々到大磯へ向つた。中には河原に残つて朝の寫生を續けてゐる人もある、海岸へ出て三脚を据へた人達もある。

二時頃大磯へ着、こゝの海岸でも三々五々寫生を始めた、船を畫くものもある、海を寫すものもある、三たび黒雲の襲ふ處とな

り、寒風に連れて急雨面を撲つに耐りかれて、一同道具を纏めて旅舎田村屋へ引上げた。

田村屋の廣間には火鉢に火が熾んに起つてゐる、盆の上の煎餅は八方から出る手のために忽ちに消えて仕舞つた、寫して來た繪を修正するもの、知人への繪葉書を描くもの、湯に入るもの、お饒舌するもの、それと、何れも忙しい。

夕飯が済んでから出掛けた人もあるが、同行者を調べて見ると四人不足だ、みどり會の人達は平塚から歸つたやうだが、研究所のオー君とアイ君が見えぬ、ドーしたのだらうと心配してゐると八時頃やつて來た、オー君は手に鷗の生きてゐるのを提げて、椽側に突立つて、宿の名を知らなかつた、め大磯平塚の間を三度も歩行いて尋れたといふ、其鳥はドーしたのかと問ふたら、海岸で寫生してゐる時傍へ來たから、三脚を叩き付け手捕にしたのだといふ、兩翼を擴げて見たら四尺餘もある、大した獲物で、オー君にとつては恐らく今日の寫生畫より此方が値打があるであらう。

人も揃つたので、寄附金で虎子饅頭や密柑を澤山買つて遊びを始めた、カルタは一向振はなかつたが、アンマさんは大當りで、奇想天外より墮つるの隠し藝も出た、例の吊し喰もやつた、かくて夜も更けたので、一同明日の寫生の成功を祈りつゝ臥床に入つた。

明くれば二十二日、一點の雲もなき好天氣で、朝の三時頃より起きて騒いでゐる者もある、東も白まぬうちから寫生箱を肩に

して飛出す連中もある、七時頃には皆一二枚の獲物をして歸つて來た、そして饑虎的體度で朝飯をすませ、大々の握飯の包みを一つ宛腰にして、是からは銘々自由行動をとる事として爰に一先寫生會を解散した。

*

*

*

*

予等一行九人、富士を寫さんとて千疊敷に向ふ、登路峻しくエス老人大に艱む、山上にはさきに別れし五六の所員ありて頻りに筆を揮つてゐる、今朝は富士も鮮やかで、海も平で、眺望極めて佳なりである。十一時下山、エス老人は茅ヶ崎へ、予等は約あれば停車場へ向ひ、藤澤より江の島、こゝに見物をすませ、夫より鎌倉長谷に三條家別邸を訪ひ、公爵並びに夫人の懇篤なる待遇に、合作やら繪葉書やら時をも忘れて樂しみに耽り、漸く九時の汽車に乗つて夜半無事歸京した。一行の間に起つた滑稽な出來事は、別欄に各々出品してあれば就て見られよ、但こゝに載せざるものは極々つきの内所事と知り給へ。(完)

ないしょく

眞先に出了したのはテー、エーと申もの、時は朝の五時大急ぎで研究所へ出掛けたら、奥の方に脊の高い洋服着た人が居るので、テツキリ大下先生と思ひ込んで謹んでおジャをした、すると、皆さんが笑ふのでよく見たら何のこつた同窓のエー、エム君だつた。エー、エム君は随分澤山出品がある、大磯でエス、

エム君の帽子を冠つて探させたり、チヨツカイを出して演猫に手を咬まれたり、曰くつきの洋服を他人に見せるのを厭がつて、マントを脱ぐと直ぐ宿屋の貸浴衣を羽折たり、千疊敷では山から飛下りて御得意の腰拔かしをしたり、數へ立てたら際限がない■大船で上等辨當を買つて、散々荷厄介にしてはゐたが、それでも食ふ時を樂しみに我慢して持つて來たのに、イザとなつたら情なや飯は冷たく硬くマヅク、二十五錢捨てたやうなものだとコボしてゐた先生は誰？、寫眞を見るとワカるとき■馬入の鐵橋の下で汽車に小便をカケられたといふてゐた人もある■いざ寫眞といふ時雨がヤケに降つて來た、風がベラボーと寒い、皆々震へ上つて其不景氣なザマといふたらない、『シツカリ爲給へ寫眞に寒い顔が寫つたら罰金だ、モット暖かい顔を爲給へ、』『先生、暖かい顔とはドンなに爲たらよいでせう？■橋の傍の茶屋で辨當を遣つたが、早くから汽車の中で濟ました連中はさも羨ましそうだつた■隱居さんは手がカシカンでナイフを出す事も出来ない■宿屋でマントが紛失したといふて蒼くなつて尋ね廻つてゐたら、下で女中が疊んで仕舞つて置いてくれたのだときいてホット息をしたのはテー、エー君■お菜が足りなくて飯を食つたやうな心持はしないと苦情をいふから、何杯喰つたかときいたら、タツタ六杯だとさ■是ではお菜も足るまいよ■朝は勘定してゐたら九杯喰べたよ、■玉子焼に醬油をウンとかけて泳ぐやうにして大切に食べたが、それでも不足で隣りの香の物を卷上げたのはスサマツイ■モー止める積りだつたに、御給仕

がまだ居たから氣の毒に思つて改めて一杯餘分に食べたと言譯つきのもある■食事中一度運動に起たのは此方だつた■電燈のホヤを掃除するのは面倒だらうといふ質問も無邪氣だが、呼吸で吹消して見せるとリキンでゐるのは驚いた者だ■アンマサンの時の隠し藝で一番振つたのはエス老入の隠し壘、當年七十二歳、夜中小用に起きる事正に十四度、不得止壘の用意をして來た、大切のものなれば今朝から腰につけて肌身を離さず持つてゐたと、座敷の眞中へ出された時は一同アツといふて二の句が次げなかつた■アカちゃんにナオちゃん湯に入つて二三時間も出て來ない、その筈き一週間分の垢を落すのだといふので東京から石鹼迄用意して來たのだもの■突然クリムゾンレィキの月が出たといふて叫ぶものがある、ナアニエメルドグリンだといふのがある、大磯の月だとてそんなに種々には見えまいに■嬉しいのだから面白いのだから夜の三時前から起きて饒舌り散されたのには閉口した■菓子を買ふ時帽子を持つて廻つて集めたが、五厘しか出さなくて饅頭をウンと食つたと白狀してゐる人もある■五十錢出す振をして一寸見せて其實二錢だけ投込んだといふ横着者もある■エヌ、エム君にいま二發喰つて來たと朝ばらから祝砲を見舞はれた人もある■祝砲はエヌ、エム君の御得意の隠し藝といふことも此時露現した■宿屋の女中がイラク引張つても雨戸が明かない、ヨシキタ己れが手傳つてやると勇ましく出て來たぜツト君、引くべき戸をウン／＼いふて押してゐた、コレではドンナ大力でも明きつこはない■三人

分の寢所を二人で占領して、夜具を三枚かけて寢たものは俺ればかりたろうと威張つてゐた人もゐた。ノノノ僕も三枚かけて寢ましたよ。海岸から犬がついて来て二階へ迄も上るといふ騒ぎ、その犬が居ないといふて椽側へ出て大聲でイヌノと叫んで居た人が居た狗を呼ぶのにイヌノは可笑しい、モシノも變だ、名を知らなくとも斑とか赤とか何とか呼びやうがありそうなものだ。鎌倉行の一行が藤澤で汽車から下りて江の島行の電車へ乗つた、緩々と座席を取つてゐたら跡から盛んに乗つて来る、忽ち満員だが電車は中々出ない、氣の短かい人はベルを引いて催促して居る、随分待たせるがそれでも早く来たために腰かけて居られる丈け仕合せだと、車が出ない不平はあつたが此方で慰めてゐた、スルトやがて電車が一臺着いて、客が下りると車掌が前の車へお乗換を願ひますといふ、形勢一變遅く来て少ししか待たなくて車中に起つてゐた人が座席に着いて、早くから待ちに待つてよい座席を占めて喜んでゐた吾々が立往生、それもワルクすると満員でお次へ願ひますを食ふ處、ア、世は塞翁の馬なる哉。あとできいたらサツキの車は待合所だとさ。江の島の榮螺の小さくなつてそして不味になつたことモロコリノ。三條さんの御邸での合作には弱りましたよ。東京へ歸る迄に屹度何か失策がありますよなんて噂をしたものだから、三條邸を出ると間もなく寫生箱の蓋が明いて、眞暗闇の中へ一切の道具を抛出して仕舞つた。それは誰？ ソレ一番元氣で一番お酒に酔つた人さ。あまり急いだからさ、そんな事言はずに手

傳つて拾つて呉れたまへ。早くしないと汽車の時間に間に合ないよ。急いた。車室乗合一人もなし正に買切と申次第で誰れに遠慮もないから耐らない、唱歌、詩吟、謠曲、歌ふものは何でもござれ、舞踏も始まる、ハーモニカも始まる、知つてゐる丈けを不殘お洩したのはゼツト通人にエム先生。手を叩いて大に景氣をつけたのは一行全體。此流車は大船で乗換ときいてゐたので急いで飛下りてブリツチにかけつけたが、車内から下りる人が少しもない、變だわいと車掌にきいたら、直行だといふ、ヤー大變と先へ往つた人と呼ばひ集め、再び元の車室へ逆戻りの體、お早く願ひますと驛夫の聲が烈しい、これが最後の失策で夫からは居眠りながら無事に新橋へ着いた、めでたしノ。

△ △ △

在臺北、石川欽一郎氏の近信によれば同氏は一月下旬同氏一人の自作展覽會を開きしに非常を盛況なりしと、猶引續きて總督府國語學校官舎の一部に研究所を開きしに同好者盛んに集まり來り立錫の餘地もなき程の有様にて何れも非常の熱心を以て墨炭畫より稽古をなしつゝあり、石川氏は隨時出席し、一週一回は特に講話をなして懇篤に授業せられつゝありといふ

* * * * *

寄書

自分が水彩畫の初め

信州上田 西堀良民

恰度去年の正月の事、年初の客の往來も少くなく吹雪のはげしい日であつた、餘りに無聊であつたので直ぐ近所の小學校の先生の所へ遊びに行つた所が例の通亦畫を書いて居られる、中學世界の口繪だ、よく飽きないものだと思つて見て居ると二三十分で仕上つた様だ、二間許彼方の壁へ張つて頻りに目を細くして眺めて居られる、上手だらうと云はれる成程目を細くして見ると美しく見えるから下手ではないと答へた、「君は幾度云うても書いて見せんね」「馬鹿らしくてさ」「面白いよ書いて見給へ」「なに畫家になるじやなし氣狂じみた」と云うて居ると其所へ矢張畫の好きな先生が來られた、さあ馬鹿にする、冷かす、美術的思想の無いものは哀むべしだとか何んだとか大變な熱を吐く、よろしい！驚く様な物を書いて見せよう、強情にも、と決心して早速家へ歸つて來て三宅先生の富士の畫を、先づ中

風病の様な線て輪廓を取り、色色と色を捏れて彩つて見た、元來畫は下手で好まぬ方であるから上手に書ける譯がない、それでも自身自慢で直ぐ持つて行つて見せると賞める所が大笑い、此野郎と思つたが今度こそはと思ひ返して翌日は日曜日なので朝から書き初めた、仲々うまくゆかぬ、其中に悔やしくて涙が出て來る、漸くの事一日中書いて一枚仕上げて見ると前のより幾分よい、さあうれしい、止め様もなくうれしい、持つて行つて見せると前より餘程よいと云はれる猶々うれしい、面白い、扱たまらん毎日毎日學校から歸へると畫筆を持つたぎり何もしない、斯んな事が二ヶ月許學期試験となり其も終へて試験休も畫筆と畫用紙で暮し漸々三學年になつたが如何程忙しくも二日と書かなければ居られなかつた、其中に前の先生が春鳥會發行の**みづゑ**を示された、自分は驚きもし、勵されもした、そうなると畫と名づける者は何んでも見落す譯に行かぬ、雜誌の**カット**であらうが、錦繪であらうが、新聞の挿繪であらうが、

手あたり次第だ、それかあらぬか第一學期には今迄善くても六十點位であつたのか八十五點となつた、其時自分は天にも昇る心地がした、

秋の十月の末淺間へ登つた時、朝霧が霽れて鬼躑躅や檜の眞紅なのを綠樹の間に眺め、歸途桔梗色なる彼方の山から、薄紫したる林梢に盆の様な黄色い月を眺めた時、云ひ知らぬ畫興に胸を踊らし心の美しうなるを覺へた事があつたが是も皆繪の賜かと思つと今更感謝せずには居られない、終

豆相の一日

夏廻家主人

此陽氣を、紅塵の裡に燦ぼりて、すこすも本意ならずと、茲に伊豆めぐりを思ひ立つたのは、都は花に浮かゝる四月の初めてである。

國府津行の二番列車は午前十時と聞けば、支度も、そこ／＼に繪道具引擔ぎて宿を出づ、折しも降り續きし前日の雨にて、途上木々の若芽は一段に生氣を添へ、江戸川の櫻花は、はや七分通りも綻びけり、名殘惜

しくもそれを後に見て電車に揺られつゝ新橋停車場に着けば、發車迄には、まだ二十分許りの間あり。

やがて汽車は緩々と進行をはじめ、芝浦あたり馳せる時、今朝はさりとて覺えざりしが、又もや雨雲たちこめて、品川の空も仄暗く、灰色の眞帆片帆遠近に漂ふを見るのみ、富士の高嶺も今はその頂だに見せず、茅崎大磯あたりには未だ人多からねばいともの淋し。

かくして國府津につけるは、十二時を過ぐる四十分、直ぐに小田原行の電車に乗る。唯一輛の三等車に闇雲押詰められて身動きもならず、ゆられ／＼て行くほどに、酒匂川もいつか横切り、右手に足柄龍神岳など眺めて進む、酒匂の街を通るころ、氏神の祭禮とや、村人ども旭に櫻の山車を曳きつゝ、傍へには白きものしたゝかに塗りて、忠臣藏の扮装厳しく、それ／＼に槍小太刀搔込みたる若者附添ひて練り來るに逢ふ、娘内儀も今日を晴と着飾りて、もの／＼しく電車を打成るも可笑し。

二時少しすぐるころ、小田原に着きて三時

十三分發の熱海行輕便汽車に乗りて南す、されど汽車とは、ほんの名ばかり、青梅線のそれよりも狭く小さくして、之もたゞの一輛、尤も一二等車は別なれど案外に客多ければ二等三等もあらばこそ、吾勝ちに突き除け押し退け辛うじて坐を占む、あはれ議員の歳費請取るも斯くやなど要らぬことも思ひ出でつ、やがて汽車は酔泥のぐらつく様に、或はだしぬけに引手操る様に、柄にもなき大聲の汽笛鳴らしつゝ進むほどに、田舎の車掌の香氣き加減、車が停まりても絶えて其地名を呼ばれば、那邊が其處やら搔暮れ解らず、車内にては知らぬ同士の押問答、中には足許から鳥のたつ様に、物忘れして飛び下るなどの滑稽もあり。伊豆の海岸は、なか／＼に嶮阻と聞きけるが、汽車の沿道は分けて甚しく、百仞の懸崖を脚下に瞰て、生死一瞬の膽を冷す場所も尠からず、乗合の一紳士、傍への人に顛落の虞なきや、など問へば其人答へて、されば此汽車の脱線は屢々聞きつるが、此間端なくも一輛顛覆して、多くの怪我人をつくれり。その中に、さるやむごとなき姫君

の、いたく額を傷りて、今尙眞鶴病院に治療中なるが、洵にいたはしき限なり、などまのあたり聞かされては、追に好き心地もせず。

さるほどに坂を登り、山を超へ、畑を横切り、村を過ぎづゝ、左手に相模灣の窮りなき海原を眺め、近く渚に跳る白浪を瞰下し、蛸り／＼て行く中に、汽罐車に故障を生じたりとて、江の浦停車場に待つこと半時間ばかり、横合より、口善惡なき頼智者、是では輕便にあらずして不便鐵道なり、など云へるも理ぞかし、それより程なくして眞鶴停車場に着す、霎時茶亭に憩ひ、里路傳ひに、とある小丘の裾を繞りて、黄昏眞鶴の街に出づ、此處にて銚子あたりの漁師町にも似たる石段幾つとなく下り、平井屋といふに靴の紐を解きぬ、案内されたるは、床の間もなき汚らしい四疊半、段通のしかれたるはよけれど、いたくもの古りて所々に拳ほどの穴さへあり、さは謂へ何時も財布の底輕き素寒貧には、仰山な待遇をうけるよりも、却てこの方が都合よく、贅澤をぬかすでもあるまいと、下婢のするがま

ゝに、それは兎もあれ、襖隔てし四五人の相客、女二人ばかり連れたれば、夜更くる迄高聲に嘯合ひ、かしましいふ許りなし、其又隣には行商人とも覺ゆるが、圍碁を賭けて、金錢の音をチャリ／＼とさするに、はや胸悪く、中々に寢心地安からざりし。

畫題數種

和歌山 晩 雨

▽トンネルの中は、吾人に一つの畫題を、供して居る。此の世から不意に、地獄へても落ちた様な、感の起る刹那、パツと光るマツチ、阿彌陀様にても會ふた様に「安心」てふ表情をした、優美な圓滿な曲線を有する女の顔や、剛、健、壯、強などを表はす凹凸多き男の顔而が、ハツと思ふ瞬間、思はぬ光明に會うて、この一點の救主に向つて集中する、其時各自輪廓だけが赤く、ハツキリと、暗の中に見える。此瞬間には、汽車中にある感は全く去つて、ただ何とも知れぬ神秘的なインスピレーションに打たれるものである。

▽十一月頃から三月頃へかけて、海岸の空

氣は何となしに重くなる。而も午前中は一層である。此の頃、海岸では船の底裏を焼く爲半ば傾いた漁船の下から、篝火がポツポツと燃えだして、そんなのが向を變へ、位置を變へて、三ツ四ツ、バツクには重き空氣に閉ぢられた松林(或は大海岸)を置いた景色、サシコを着た漁夫が其點景となつて居る。之一の畫題とすべきものである。▽關西の田舎には、大抵何處にでもある景色だが。ス、キといふ物は、余程畫趣のあるものだ。一つの村があれば、大抵は小川がある其兩側の堤に沿ふて、櫟が高く低く連つてある、其落葉した櫟に、秋から初冬へかけて、順樸なる農夫によつて作られるのである。其冬景色(廣くとれば田舎特有の茅屋が、遠近に畫面へ浮ぶ)それは確に一の畫である。

△薦、之れも畫趣あるもの、古寺の薦、老樹の薦、古塔に對する薦は、總べて畫味ある配合である。ワシントンのスケッチブツクに「I saw the mouldering ruin of an abbey y ovirrun with ivy」とある。日本の廢寺は或は、色彩に乏しいかも知れぬ、併し其所

に父雅味もあれば、俳味もある。而も其破れた壁に、褪色した朱塗の柱に、骨の碎けた狐格子にからみついて居るに至つては、即ち畫である。此の女性的の優しい植物が、何百歳にもなる老杉の、折れた枝を、からくも支へて居るのは、實に詩である、畫である。

▽去年夏、高野山下に一鑛山を訪ふた時。坑内に案内せられて、自分は其處にも一つの畫題に觸れた。娑婆から隔絶した別世界の様な、暗黒界で働いて居る坑夫、淡赤いカンテラに照された其顔(終日否一月も一年も、太陽に照された事のない青白い)、其手に握つた金槌、腰に佩いた金棒、異様な形に掘り碎かれた周圍の鑽石、滴り落つる水、之等を綜合すれば即ち畫である。其顔面の表情と周圍の光景は、人間社會の中にも、こんな生活、坑夫生活といふ一種の浮世の日を浴びぬ生活があるといふ事を、表はす事が出来るだらう。▽自分は和の十津川で數ヶ月を暮した事がある。あの地方の人は、未だ昔の武士を忍ばれる面影がある。其人達が、異様な袴

をはいて、之れも昔の名残なる圍爐裡を圍んで焚火をなしつゝ、樸訥な世話しに耽つて居る光景、彼等の顔には、「不安」もなければ「野心」もない。實に凋落した武士だ。こんな光景を度々見たが、今から考へれば好畫題たるを失はず。

致候

近事雜聞

△小樽白百合會第二回展覽會は、本月七日八日同地英和學校に於て開會、會員及會員外の出品のほか、參考として専門家の出品も多數ありて極めて盛會なりしといふ。

▽安中みづゑ會主催の洋畫展覽會は、本月十三、十四兩日同地小學校に於て催され、參觀人頗る多く盛況を呈せしといふ。

△東京美術學校洋畫科本年の募集人員は二十五名にして、希望者九十八名あり、去る一日二日木炭寫生の試験あり、及第者は何れも一二年デッサンに従事せし人々のみなりしといふ。

△函館パレット洋畫會にては、三月廿七日と三日間同地一貫補習學校にて展覽會を開き、百五十餘點の出品ありしといふ。

讀者の領分

■皆様のところに洋畫講義録の六號から十二號迄のを御不用の方は相當の代價で譲り受けたく思ひます（千葉縣長生郡二宮本郷

村安藤滋）■吾地方に今年も夏期講習會を開かれたし（信濃生）

問に答ふ

■◎小樽紫明生へ、彫刻刀は出來合はない入用の人は東京市本所區表町四十五吉田松太郎氏へ頼まれたなら作て呉れる代價は四十錢位ひとの事■高松康之助氏は會友なりや（松岡生）◎會友なりしも本年一月以來會費を送らず居所も不明■ハガキ文學の定價を問ふ（上京生）◎毎月一回一日發行定價十錢發行所は東京小石川久堅町日本藥書會■OW紙に寫生せしに色が吸収されて困る如何にしてよきや（撫子）◎紙が古くなつたか濕氣を帯びた故ならん救済によき手段なし■一 ワットマン全紙を水貼する方法如何■二 銀泥と他の繪具との調和の良否■三 圖按畫手本の賣捌所（小樽蝦夷の子）◎一 小なる紙を水貼すると別に變りなし縁に貼る紙は丈夫な者を選べばよし■二 金銀は多くの色に調和よき者なり詳しくは『水彩畫階梯』の巻尾を見よ■三 東京日本橋大倉書店に圖案の書ありしと覺ゆ問合はされたし。

■本號は全部小笠原紀行を以て編成すべき筈なりしも、記述すべきこと頗る多く、ために一冊にては纏り兼ね候につき、續稿は次號以下に漸次掲載することと致し候

■口繪原色版はワットマン四ツ切大にて、寫生の儘少しも手を入れざるものに候

■次號にはイースト氏寫生談の續稿、靜物寫生の話、藝術小言、アルフレッドパルソンス氏の日本の初夏等を出すべく候

■日本水彩畫會々友諸君より、番號の御問合せ有之候得共、通信其他には番號を用ふるに不及候間左様に承知ありたく候

■繪葉書競技會の題は人の顔（寫生）菜の花（圖案）にて、×切は本月末日迄に候、出品者は郵券五錢を添へ本會へ御送付あれば、選評の上他の出品の分と交換して御返送可

